

私たちを助けてくれたベルリンっ子たち

——ユダヤ人を救った人々 (10)——

Die Berliner, die uns halfen, die Hitlerdiktatur zu überleben

平 山 令 二

要 旨

前回に引き続き、今回も救われた側のユダヤ人の体験記を紹介する。ベルリンで夫とともに地下潜行生活を2年半あまり送ったイルゼ・レーヴァルトの講演である。彼女は、母親など近親者が強制収容所に全員強制移送されたあと、「地下潜行」を夫とともに決意し、決行する。彼女と夫は、ユダヤ人共同体、共産主義者や社会主義者、自由主義者などの強いネットワークを持っていなかったため、いわば出たところ勝負的な「地下潜行」であった。しかしながら、地下潜行前の知人たちだけでなく、知人に紹介された見も知らぬベルリン市民たちに支えられ、彼女と夫は長期間にわたる「地下潜行生活」を無事に送って、ドイツの敗戦を迎えることができた。特別なネットワークがなくても生き延びることができた彼女の体験記は、逆にそれだけ多くの普通のベルリン市民が、純粋な人間愛からユダヤ人救済に危険を冒して取り組んでいたことを証明するものである。

キーワード

ホロコースト、潜行ユダヤ人、見も知らぬ救済者、人間愛

前回に引き続き、今回も救済された立場のユダヤ人の手記を紹介したい。今回の主人公はイルゼ・レーヴァルトという女性である。イルゼは、1918年にベルリンに生まれ、2005年に同地に没している生粋のベルリンっ子である。彼女の父親は獣医であり、夫のヴェルナーもユダヤ人のインテリアデザイナーだった。ベルリンで地下潜行生活を送り、終戦を迎えたイ

ルゼはホロコーストの「語り部」として講演活動を長く続けていた。以下は、1975年3月14日に行われた講演である。イルゼは年代順に自分の過酷な体験を語っている。

1

1940年

私の夫は、ユダヤ人労働局から2種類の強制労働の可能性を提示された。ひとつ目はゴミ処理であり、もうひとつはドイツ鉄道の仕事であった。夫は鉄道を選択し、線路の改修を昼夜交代制勤務で行なった。報酬は、ユダヤ人に定められた賃金、すなわち時給72ペニヒだった。夫の同僚は、大卒、商人、職人などで、重労働には慣れていない人たちだった。それに、ユダヤ人にはわずかな食料しか配給されていなかった。卵、ミルク、白パン、菓子、魚、鳥肉、缶詰は許されていなかった。

1941年、私は空軍の軍需工場で強制労働をさせられた。1日10時間働かされ、食堂に行くことは禁止され、ユダヤ人用トイレも一か所しかなかった。重い鉄の塊やネジを検査し、最後に検査済みの検印を押した。もし、欠陥品に検印を押してしまったら、サボタージュの罪で訴えられることになる。逆説的な話だが、私たちはドイツの軍需工場が必要とされていることに、よろこびを覚えていた。

ドイツ人の同僚が何人も、私たちにこっそりと果物、牛乳瓶、タバコなどを手渡してくれた。ユダヤ人の同僚はベルリンのあらゆる地区から長時間かけて通勤していて、年齢は14歳から65歳までの女性だった。会話することが禁じられていたため、私は手元にメモ用紙を置いていて、そこに思いついた物語や詩などを速記で書きつけた。それらのメモは、見つからないようにすぐに捨てた。思いを書きつけることで、単調な仕事に耐えることができた。

1941年9月19日、すべてのユダヤ人は左胸に黄色いユダヤの星を目立つようにつけなければならなくなった。また、あらゆる仕事着にユダヤの星を縫いつけなければならなかった。ユダヤ人は、自宅から仕事場までの正確な交通路を示す乗車許可書を与えられていた。私的な用事のために乗物を使うことは禁止されていたからだ。親戚や友人を訪問する際には、歩いて行かなければならなかった。ベルリンのような大都市では、どこへでも歩いて行くことはほとんど不可能だったが、日曜の朝、私たちは1時間以上かけて義兄のところに出かけた。ホームコンサートが催されたからだ。大家は年配のユダヤ人夫妻で、音楽好きだった。その夫妻は自殺してしまった。夫の方は第1次世界大戦に出征し授けられた栄誉ある勲章を胸一杯につけ、亡くなっていた。強制移送が差し迫っていたので、夫婦して睡眠薬を飲んだのだ。

1941年10月、私のとなりで作業していた18歳の可愛らしい娘が不安に震えていた。ユダヤ共同体から「リスト」が届き、そこに家具、着物、銀行口座、などすべての財産を書き込むように、との指示がなされていた。彼女が他の住居に移動させられるのか、それとも東部のゲットーに移送されるのか、誰にもわからなかった。彼女は母親と暮らしていたが、母親は心臓が悪く、ショックを与えるわけにはいかなかった。翌日、その娘の作業場所は空席になっていた。彼女と母親はゲシュタポに連行されたそうだった。かつてのシナゴークに集められ、移送されたそうである。

どんな基準で「リスト」が送られてくるのか、手がかりを得るためにみんな頭を絞った。だが、この難問を解く鍵はなかった。裕福なユダヤ人にも、貧乏なユダヤ人にも「リスト」が送られてきたからだ。移送の際には、10マルクの現金と持てるだけの荷物を持参することが許されていた。友人のピアニストも、夫の親戚も移送された。私たちは、持ち物のすべてに名前を書きつけ、リュックサックに詰めて準備していた。いつ私たちの順番

になるかわからなかったからだ。ミンスクなどに移送され、厳しい管理下で労働させられるものと考えていた。オプティミストは、あちらの方が嫌がらせは少ないだろう、と楽観していた。

1941年12月20日、工場で母の電話を受けた。「リスト」が届いたので、私にすぐに休暇を取ってくれ、というのだ。上司の許可をもらい、母のところへ行き、母に冷静な対応を促した。私たちは、強制移送を止める希望をまだ捨ててはいなかった。知人のなかには、移送は中止された、とか、金を払えば「リスト」から名前を消すことができる、と話している者がいた。そんな噂を信じるができなかったので、私は自分でゲシュタポの事務所に出かけた。そこにいた親衛隊員が、一体なにしに来たのか、と尋ねた。鉄道で働いている夫や軍需工業で働く私の世話を母親がしてくれている、と説明した。父は第1次世界大戦に志願兵として出征し、戦場の4年間で腎臓を悪くし、そのために戦後に病死した、とも説明した。叔母も「リスト」に載っていたので、私は母だけではなく、叔母の名前もあげたが、親衛隊員に、特別扱いなどできない、と怒鳴りつけられた。深く失望して、私は帰宅した。

母と叔母がどこに移送されるのかわからなかったので、ふたりが移送された場所に私と夫も転勤しよう、私は提案し、夫も同意してくれた。家族と一緒にいれば、なんとかなるはずだ、とまだ考えていたのだ。私は会社の上司や重役に相談して、転勤できるように取り計らってくれ、と頼み込んだ。夫も転勤許可を申請したが、上司がゲシュタポに問い合わせたところ、鉄道で働くユダヤ人は労働力として不可欠なので、転勤はさせられない、とのことだった。

母と叔母の「リスト」は実行に移され、1942年1月11日、ふたりはゲシュタポに連行されてしまった。工場の同僚のひとり、本物の絨毯を1000マルクで私に売りつけた。その金で彼女はヴェロナールを買った。「リス

ト」が届いたとき、彼女は平静だった。翌日、彼女が自殺したと聞かされた。自殺のニュースに私たちはもう驚かなくなっていた。むしろ、自殺する勇気を持っていた人をうらやましく思うようにさえなっていた。自殺した人は、これ以上苦しむ必要がないからだ。ある夜、玄関のベルがけたたましく鳴った。ゲシュタポの家宅捜索と思い、家にある禁じられた食料品を血の上った頭で数え上げて、キリスト教徒の友人たちがプレゼントしてくれたオイルサーディンの缶詰やリンゴなどを窓から投げ捨てた。もう一度ベルが鳴り、私は冷静な振りを精一杯してドアを開けた。そこにいたのは、異人種間結婚をしていた友人だった。彼らは、全力で私たちの支援をしてきていた。そのとき初めて興奮状態に襲われ、私の全身は震え出し、ひと言も話せなくなった。彼らは、私たちがどうして茫然自失しているのか、と尋ねた。ゲシュタポの家宅捜索で、禁止されていた食料品が見つければ、強制移送されることになるから、と説明した。彼らは、母が生きている証拠を手にいれたので、私たちをよろこばせようとやって来たのだ、と話した。彼らの友人が、リガのゲッターにいる母の書いたメモをうまく持ち出すことができたのだ。それは確かに母の筆跡で、私は大よろこびした。母はリガのゲッターで暮らし、国防軍のための仕事をしている、とのことだった。母は、私を勇気づける言葉を書いて、さらに、私たちのことを心配している、と書いてくれていた。

2

1942年

食糧事情はますます深刻になった。ユダヤ人には肉の配給はなかったが、夫は重労働従事者の証明書を持っていたため、週に200グラムの肉をもらえた。友人たちは密かに魚を運んできてくれ、八百屋の女性はカリフラワーを包んでくれ、私の昔の乳母は配給を節約し、小鍋に入れて滋養の

ある食物を運んでくれた。私が初めて習った先生は結核で病床にあり、養生に必要とされていた固ゆで卵をためて小包で送ってくれた。私たちのキリスト教徒の友人たちはみな、愛情と同情を示してくれた。彼らは夜、見られないようにして私たちの住まいを訪ねてきた。玄関のドアには大きなユダヤの星がつけられていた。ユダヤ人は夜8時以降外出を禁じられていた。ただ夫は夜の鉄道線路の労働のために、ゲシュタポから特別許可証をもらっていた。この時期、私たちは互いに顔すら見ることができなかった。私は朝6時には家を出なければならなかったし、私が帰宅した頃には、夫は夜の労働に出かけなければならなかったからだ。ユダヤ教の最も重要な祭日も無視されて、夫たちは働かなければならなかった。職長たちはユダヤ人に嫌がらせをしてよろこんでいたが、現場監督は公平な扱いをしてくれ、できる限り夫たちの尊厳を守ろうとした。

1942年12月、夫の両親が連行され、アウシュヴィッツへ移送された。16歳になる夫の異母弟は両親から離れて、途方に暮れて私たちのところにやって来た。彼をかくまうことができなかったので、彼はまた両親のもとに戻らなければならなかった。翌朝、工場で出会ったのは不安そうな顔ばかりだった。新しい「リスト」、移送、新しい苦しみが繰り返された。私たちのなかで、母親、兄弟、親友を強制移送で失っていない者は、ほとんどいなかった。このような状況で、困難な時期、錯綜した運命に見舞われる時期にしかないような、互いを思いやる自己犠牲的な助け合いが見られた。今でも忘れられないのは、初めて母なしで過ごさなければならなかった私の誕生日に、同僚の女性が焼いてくれたお菓子だった。私をよろこばすために、彼女は必要な材料を長い期間かけて少しずつ蓄えていたのだった。

次第に、アウシュヴィッツ、ビルケナウ、リガ、テレージエンシュタットといった強制収容所の様子が漏れ聞こえてくるようになった。集団処刑、

射殺といった言葉も聞こえてきた。ミンスクの集団殺害のことをドイツ兵が話していた。「疎開させられた人」は死を免れ得ないことがはっきりしてきた。

ある朝、恐ろしいニュースを聞かされた。これからは、あらかじめ通達することなしに路上や工場からそのまま連行される、ということだった。鉄道や軍需工場で強制労働に従事させられていても、もはや連行を免れることはできない、とのことだ。夫の兄弟が私たちの家族で最後に連行された。これでもう、私たちが逃亡しても、そのことで危害が及ぶ可能性のある家族はひとりもいなくなったことになる。もし誰かが地下潜行したら、その家族はゲシュタポに人質として逮捕されるのだった。「特権的な結婚」、すなわち子どものいる異人種間結婚をしていた親友たちは、ベルリンで非合法的な生活をするようにと私たちを激励した。彼らは、まず夫をかくまってくれる、と約束した。私は自分をかくまってくれるように他の知り合いたちに頼んだが、隣人の目があるからと芳しい返事をもらえなかった。救いはないように思われた。

3

1943年

1943年1月11日、マイナス20度の身を切るような寒い風が吹く日だった。私はP家に出かけた。彼らと面識はなかった。ある友人が、P家の人々はとても人間的で人助けをいつでもしてくれる、と語っていたからだった。P家のユダヤ人医師の父親は、最近亡くなっていた。キリスト教徒の娘と母親は、迫害されているユダヤ人をできる限りかくまっていた。私は絶望していたので、初対面の彼らにかくまってください、と厚かましくも頼んだ。しかし、すでに危ない状況にあるので、これ以上リスクを増やすわけにはいかない、と断われた。泣きながら私が階段を降りていると、

後ろから呼び止められた。みすみす私をゲシュタポに引き渡すわけにいかないで、当面自分たちのところにいるのもよい、という申し出だった。

この日から、私はユダヤの星をつけず、警察に届け出もせず、食糧切符もなしで暮らし始めた。家具、下着、陶磁器などすべて置いたままの住居も放棄した。少なくともベットカバーや防寒着だけでも取りにもどろうとしたが、新しく友人となったP家の人たちに危険過ぎると止められた。地下潜行したユダヤ人は、必要不可欠なものを取りに戻るだろう、と見込んでゲシュタポが張り込んでいるからだ。夫と私は、仕事に行かなくなった。私たちの仕事場からも強制収容所への新たな移送が行なわれた。

こうして私たちは隠れ家を確認し、玄関のベルが鳴っても不安にかられる必要はなくなった。しかし、食糧までも家主に期待するわけにはいかなかった。配給はぎりぎりだったからだ。私たちは路上、デパート、地下鉄など、どこでも逮捕される危険にさらされていた。ユダヤの星をつけていなかったのも、誰かにユダヤ人だと密告される可能性があったからだ。食糧確保のために、とにかく仕事を見つけなければならなかった。遠い親戚のキリスト教徒の女性が、自分の洗濯屋で週2回働かないか、と誘ってくれた。他の店員に気付かれないように、私は「レットゲン夫人」という変名を使った。洗濯屋の重労働のため背中が痛くなったが、その日の食事が提供され、他にもパンや卵などがもらえた。

ある日、店の入口のドアが開いて、労働局の職員が入ってきた。労働手帳を点検するためだった。それを持っていない私は、表面上は落ち着いた素振り、実際には震えながら、トイレに行く振りをして仕事場の裏のドアから出た。点検が終わった頃を見計らって、何気ない振りをして職場に戻った。

いずれにしても、私たちはその日暮らしを続けていた。夫は2週間後に隠れ家を変えなければならなくなった。異人種間結婚の家族への規制が厳

しくなったからだ。毎晩、違う家で夫は寝るようになった。ユダヤ病院で働いているユダヤ人医師の住居に受け入れられたが、そこも危なくなったという医師の急報を受け、朝5時に夫は家を出た。8時まで地下鉄の終点まで行くことを繰り返してから、私のところにやって来た。家主にこれ以上心配をかけないように、自分たちだけで問題を解決しなければならなかった。私たちは、ある下宿のことを思いついた。その女家主は昔ユダヤ人と結婚していて、私たちに理解があり、援助を申し出てくれていた。夫を当面受け入れてくれないか、頼むことにした。問題なのは、夫がそこに入出入りするのを見られてはならない、ということだった。その下宿は、私たちの住居のあった地区にあり、顔見知りも多かったし、背が並外れて高い夫は目立ったからだ。数日間だけ、という約束で女家主に許可をもらい、私たちはほっとした。夫はベルリンの南東部で洗浄工場の仕事を見つけた。そのため、朝暗いうちに住まいを出て、夜遅く戻ってくる、という生活だった。工場は敬虔なカトリック教徒の家族経営で、男たちは戦場に出ていたので、夫は機械の洗浄の手伝いをした。カトリックの信仰に基づきその家族は夫を支援し、食事の他に食糧も分けてくれた。家族経営だったから、そのようなリスクも冒してくれたのだ。

路上や車内で証明書の検査がますます頻繁に行なわれるようになった。私たちは、ユダヤ人であるというJの印のついた身分証明書を庭に埋めてしまっていたので、ますます偽造された証明書が必要になった。ある知人が、写真を渡しなさい、と言ってきた。300マルク払えば偽造証明書を作ってくれる役人がいる、という話だった。銀行口座が閉鎖されていたので、金は惜しかったが、証明書は是非とも必要だったので、言われるままに支払った。何週間も不安な気持ちで待っていたが、結局それは詐欺だった。別の手段を探さなければならなくなった。

夫が鉄道で強制労働に従事していたときの監督は、ナチスに反対する態

度をいつも取っていた。夫は監督から暗に「地下潜行」するように促されていたので、監督を当てにすることができそうだった。ある晩、夫は監督のところに出かけ、証明書がなければ生き延びることができない、と打ち明けた。2日後、私たちはドイツ鉄道の身分証明書を2通もらった。公印の押されたものだ。そこに私たちの写真を貼った。夫は、「エーリヒ・トレプトフ、ドイツ鉄道の副班長」となっていた。エーリヒ・トレプトフは実在の人物なので、検問の際、鉄道当局に問い合わせがいても心配なかった。

問題はトレプトフ夫人の方だった。名前や職業をどう書いたらいいのか、わからなかった。残された道はひとつしかなかった。私は、夫が拾ったナチス党の党員章をつけてトレプトフ夫人の家に向かった。労働局から来た者で文書の不備を補うためにいくつか質問をしたい、と説明した。他の人間のデータが書き込まれている一覧表も見せた。夫人は、すでに労働局に登録してあるはずだ、と抗議したが、空襲で登録カードが焼けたため必要なのだ、と説明して夫人をなだめた。こうして夫人の名前がマリアであることや、生年月日、旧姓など必要事項をすべて知ることができた。おまけに、彼女はゲシュタポに勤務していたのだ！

夫の隠れ家を見つけることはますます緊急課題になっていたが、古参の社会民主党員だった美術教師が、受け入れてくれることになった。ところが、約2週間後に夫は青い顔をしてやって来た。美術教師が飲み屋で夫の存在を暗示する不用意な発言をしたために、そこにいられなくなった、というのだ。私が夫の所持品を取りに行き、美術教師にお礼を言うと、あずまやでの仕事を提案された。これまで夫は夜そこで寝ていたのだ。夫は怪しまれないように、ナチス党の党員章をいつでもつけていた。ひっきりなしに空襲があり、民間人の被害やロシア戦線での敗北などで雰囲気は一変していた。しかし、いまだに「最後の勝利」を信じていた「同志」も多く

いた。バスのなかでは証明書の検査がされていた。しかし、それはユダヤ人狩りのためではなく、脱走兵を発見するためのものだった。夫は鉄道勤務の証明書を見せ、夜の勤務から帰るところだ、と説明した。

間を見計らいながら私は、70歳になる昔の乳母を訪れた。彼女はできる限り私たちを助けてくれていた。何枚かのパン切符をためておいてくれたり、代用石鹸を用意してくれ、配給から50グラムの本物の豆のコーヒーをくれたりした。特別ひどい空襲のあとは、特別配給として本物のコーヒーが配られたのだ。それ以外はすべて代用コーヒーだった。そもそもすべて代用品の食糧ばかりが配給されていた。

1943年11月23日、うれしいニュースがもたらされた。ある兵士がリガから母と叔母の便りを持ってきたのだ。その兵士はリガに戻る前に、知人のところに立ち寄ってから、母たちに何か持って帰るつもりだ、と言ってくれた。その晩、ベルリンに大空襲があり、ベルリンの通りはすべて煙をあげる瓦礫の山ばかりになった。その兵士が空襲を無事に切り抜けられたのか、私たちに知る術もなかった。

4

1944年

1944年1月30日、地下室の明かりが消えた。耳を聳する轟音のあとで、防空責任者の叫び声が響いた。「地下室を退去しろ！屋根裏に黄燐爆弾が落ちた。男は全員、消火活動に向かえ！」私たちは、4階にある家主の部屋から貴重品を持ち出そうとした。しかし、煙はますますひどくなり、うしろ側の部屋はすでに焼け落ちてしまっていた。私たちはまたしても隠れ家を失ってしまった。一体どこへ行けばいいのだろうか。どこで私たちを助けてくれる人を見つけることができるのだろうか。1階の廊下のところに私たち4人の仮住まいが作られた。服も下着もみんな失ってしまった。

住居の問題はますます切実なものになった。廊下の仮住まいに長く暮らすことはできないからだ。私は、軍需工場で同僚だったチェリストの女性を訪ねた。彼女はドイツ人の音楽学者と結婚していた。彼女は、てっきり私たちは強制移送されたものと思っていたので、とてもよろこんでくれた。彼女は、再度、強制労働に駆り出され、市電の車両の清掃を夜間にしていた。彼女の住居は狭いので、私たちをかくまうことはできなかった。代わりに、彼女は町外れの一軒家に住んでいる友人の住所を教えてくれた。夫はそこで当面、手仕事を手伝い、私はアイロンがけのような家事を手伝うことにした。

私の同僚は友人一家に私たちの真実の姿を話した。一家の政治的、人間的な態度が黙っていてくれる保証になっていた。下の娘は空襲から逃れるためにバイエルンに疎開していた。彼女の部屋は住宅局に接収されていて、軍補給局の大尉の貸間になっていた。そんなわけで、私たちは「同志」である大尉に気をつけなければならなかった。その他、一家の友人である音楽大学の講師も下宿していた。彼は事情を知っていて、私たちの置かれた状況に心から同情していた。繰り返され激しくなる一方の空襲のため、一家の母親と娘はメクレンブルクの牧師館に疎開しなければならなくなった。それで、私たちは当面その家に住むことができるようになった。もちろん、大尉に私たちの素姓を疑われてはならなかった。私たちは彼に、市内の住居が空襲でひどくやられたため、住めなくなっている、と説明した。夫は朝、鉄道の仕事に出勤する、ということにしていた。その仕事をするために軍務から呼びもどされたのだ、と説明した。大尉はこの作り話を信じていた。夫が鉄道について詳しく話していたことも役立った。私の誕生日にお祝いの手紙が来ないことを、大尉は奇異に思って、なぜなのか、と尋ねた。私がかうまい答えを思いつかないのを見て、夫がとっさに、郵便物は市内の私たちの住居に届いているから、と返答した。実際には、私たち

の現住所は厳重に秘密にしていた。ユダヤ人のスパイがいて、彼らは他のユダヤ人をゲシュタポに密告し、引き渡している限り、自由に動きまわることを許されていたからだ。

ある朝、私ที่บ้านで掃除をしていたときに、玄関のベルが鳴った。ドアを開けると、男が立っていて、私の他に誰か住んでいる者はいないか、と聞いた。私が彼に、何を知りたいのか、聞き返すと、彼は、私が誰で、いつもここに住んでいるのか知りたい、と答えた。その間彼は手帳を開いて、なにか書きつけた。それからようやく、自分は左官屋で、数か月前に隣家への地下通路を作った、と回りくどく説明した。地下室に通路をつけるのは、空襲のあと建物が崩壊する場合に備え、第2の避難口を確保するのに必要な措置だった。彼は、作業の際に地下室に置き忘れた道具があるので、それを取りに入りたい、と言った。もちろん、私には彼を地下室に入れることはできなかった。彼は怒って去って行った。私に根掘り葉掘り質問した彼のやり方をよく考えてみて、彼がゲシュタポのスパイだという考えが突然ひらめいた。彼が説明したことは、私を連行するために、ひとりで家にいるのか、確かめる口実だったのだ。そこで地下室に駆け降り、防空用手荷物からもっとも必要なものだけ取り出した。ちょうどその時、長くけたたましく玄関のベルが鳴った。私の全身が震え出し、玄関にゲシュタポか親衛隊員が立っている、と思った。私は狭い通路をはって隣家の地下室に入り込み、暗いなか箆笥のうしろに身を隠した。私は熱に浮かされたように妄想した。ゲシュタポが玄関のドアを破って入り、家捜しをするのではないか。隣家の人がたまたま地下室にやって来て、私を見つけたとき、名乗るべきなのか、といったことを。どのくらい暗闇の身を潜めていたのか、自分でも分らなかった。永遠のように長く感じられた。

上の方でベルの音も他の音も聞こえなくなったとき、私は爪先立ちで隣家の地下室からはい出し、玄関のドアのところに電報が置いてあるのを見

た。けたたましくベルを鳴らしたのは電報配達人だったのだろうか。私の心配は杞憂だったのだろうか。いずれにせよ、こんな不安な状況が続いたあとでは、一瞬たりとも家にとどまることはできなかった。私は急いで家を出た。途中で私は夫に電話をかけた。夫に危険が及ばない用心のためである。それから音楽大学へ向かった。家主一家の友人の講師が講義中であるにもかかわらず、彼を呼び出し、さっきの事件について話した。彼も非常に不安そうな表情になり、まず様子をうかがってみる、と言った。私たちが軽率なことをしてしまわないためである。いずれにせよ、今晚私たちはあの家には泊まれない。しかし、それならどこに泊まったらいいのだろう。私たちだけではなく、ユダヤ人をかくまった人々も「ユダヤ人への便宜供与」の罪で強制収容所送りになる恐れがあった。

私が夫の職場に着いたのとほとんど同時に、有線放送が数千の爆撃機がベルリンに飛来したと叫んだ。私たちは、いくらか安全な公的防空壕に入らなければならなかった。空襲で子どもたちは叫び出し、母親たちは泣いていた。防空壕は大揺れし、なかは完全に酸欠状態だった。私は精も魂も尽き果てた。警戒警報が解除され、通りに出ると、空は血のように赤くなっていて、あたり一面の炎によって、夜なのに新聞が読めるほど明るくなっていた。どこもかしこも大混乱だった！ 燃えて、煙をあげている通りを何時間も走りまわり、朝になってようやく勇気を奮って、家主に電話をかけた。私を不安に突き落とした男が本当に左官だと思うかどうか、尋ねたのだ。家主は、バーレントという左官が実際に道具を取りに来たことがわかった、と答えた。左官の質問は無教養なため、単なる好奇心から、私がお客として来ているのか、どのくらい滞在するのか、知りたかっただけのことだった。私たちふたりとも何も断らないで一晩留守にしたことで、大尉にもう一度喜劇を演じてみせなければならなかった。胆嚢炎の発作に襲われた叔母が電話で助けを求めてきたので急に出かけることになっ

た、という口実にした。

その後間もなく、ベルリンの軍補給局が小さな町に移転した。大尉は私たちの「共同住宅」を去らなければならないのがとても残念だ、と言った。私たちの方はほっと安堵した。夫はもう通りに姿を絶対に見せることはできなくなった。国防軍が脱走兵、逃亡した外国人労働者、前線にもどらない休暇期間終了の兵士らに対する監視を強めたからだ。夫の持っている鉄道勤務の証明書は役に立たなくなった。夫は通りでの検問を危機一髪で逃れることができた。誰もが予備役証明書も携帯しなければならなくなっていた。

5

1945年

17歳の子どもも高射砲部隊に徴兵された。男性は高齢者も含め、国民突撃隊に動員された。彼らはひとり用のタコツボを掘らされ、手榴弾を投げる訓練をされ、ベルリン防衛のため通りにバリケードを作らされた。私たちの家主と彼の友人も国民突撃隊に召集された！ 友人の方はシュヴァルトツヴァルトのサナトリウムに入った。神経性発作のためという口実で。しかし、家主の方は自分を救うためになにができるのだろうか。彼が国民突撃隊の召集から逃亡するならば、彼の家にいる私たち非合法の人間はますます危険にさらされてしまう。彼が召集命令に従えば、私たちは保護者のいない状態におかれてしまう。他方で、彼は私たちを助けているからこそ目立つ行為をするわけにはいかない。彼は翌朝、国民突撃隊に加わることを決意した。かすかな望みは、オーケストラの団長から彼が必要不可欠なメンバーだと異議を申し立ててもらおうことであった。私たちは、できることはすべてする、と彼に約束した。夫は、借りてきた自転車でもベルリン中を走り回った。というのも、公的交通機関はもはや使えなくなっていたか

らだ。オーケストラ団長は、夫に異議申し立て書簡を渡した。そこには、ソロのビオラ奏者がいなければ演奏ができない、と書かれていた。書簡には、ナチス党地区責任者のスタンプを押してもらわなければならなかった。しかし、規定は数日前から厳しくなり、ナチス党の上部地区責任者の連署も必要になっていた。私はじっくり考える暇もなく、虎穴に飛び込んだ。勲章や記章を胸にいっぱいつけた親衛隊員が私を迎えてくれた。私は彼に、自分はソロのビオラ奏者をすぐに連れ戻すためオーケストラ団長から特に派遣されたUFA（映画会社）の秘書である、と自己紹介した。親衛隊員は書簡を隅から隅までながめた。不安な数秒が経過した。私はもう一度、UFAとオーケストラは文化政策上の重要な仕事をしていると強調し、スタンプを押してもらった！ それから、国民突撃隊の部隊に直行した。一秒でも無駄にすると死に直結するかもしれないからだ。すべてを片付けてから、私は兵舎にいた家主と話し、私たちの計画を説明した。家主は異議申し立ての効果を感じていなかった。一般に、すでに異議申し立ては認められなくなっていたからだ。実際、家主は、国民突撃隊から無事に返された最後の男になった。私たちは、庇護者をふたたび家に迎え入れることができ、よろこんだ。

空襲は絶え間ないものになっていた。私たちは地下室でしか生活しなくなった。デッキチェアか床に寝るようになった。近づいてくるロシア軍の戦車の音、うなり轟音をあげる爆弾の命中音が聞こえてきた。地下室をいつの日か生きてままたま出ることができるのか、わからなかった。ベルリンが最前線になったのだ！ 乾パンと生のニンジンでかろうじて生き延びた。ナチス党地区党員は、手投げ榴弾と対戦車砲で戦車の侵入を防ごうとした。無益なことだった！ 5月8日にベルリンは征服され、私たちは地下室の暗闇から明るい日の光のなかに出た。12年経って迫害者を恐れる必要はなくなった！ 助かったのだ。

私たちを助けてくれたベルリンっ子たち

私たちにのしかかっていた精神的負担、絶えざる生命の不安は、消えてしまうのにとっても時間がかかった。夫は誰に対しても非常に卑屈で、おびえた態度をとった。夫はできれば引きこもってしまいたかったろう。私はいつも逮捕、大量射殺、迫害の夢を見ていた。私たちは、一日千秋の思いで家族の消息を待ちわびていた。強制収容所を生き延びた人々のほんのわずかな痕跡を私たちは追ひ求めていた。ロシア兵は、私たちがベルリンで生き延びたユダヤ人である、という事実を信じようとしなかった。私たちの証明書、ユダヤ人の身分証は街からずっと離れたところにある庭に埋めてしまっていた。私たちは何時間もベルリンを歩いた。新聞でおおわれただけの死体、馬の死骸、爆撃の穴、廃墟を通りぬけ、ようやくその庭にたどり着いた。庭の所有者は空襲のためにずっと前にベルリンを去っていて、私たちは、庭のどこに証明書を入れたガラス瓶を埋めたのか、思い出せなくなっていた。何時間もあたり一帯を掘り続けた。証明書の他に自分たちの身分を証明する手段がなかったからだ。以前住んでいた地区の警察署は破壊されていたし、税務署では私たちは「死亡者」として扱われていた。ようやくシャベルがなにかにぶつかった。いっそう慎重に掘り進み、証明書を発見した！ イルゼ・ザラ・レーヴァルトの署名と指紋、大きな「J」の字のついた憎むべき「ユダヤ人身分証」が、私たちがまだ生きているということを、まわりの世界に証明する唯一のものになったのだ。

テキスト

Ilse Rewald: Die Berliner, die uns halfen, die Hitlerdiktatur zu überleben

